浦田道数「ネプチューンの界（3）」奨励賞

描く。神殿が建ち、人間の姿も見える。画題にあるように、海の王国の姿だろうか。そういった中で、ゆったりと泳ぐ魚の存在感が強い。紙によって鱗を表現しながら、独特の幻想世界を描き出す。

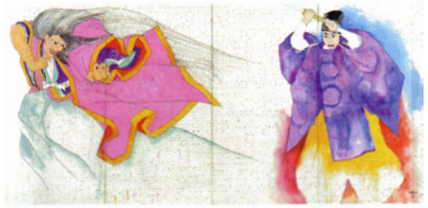
第65回記念日府展

（5月19日～5月27日／東京都美術館）

文／磯部靖

2室

廣島樹「紅葉狩」。戸隠に古くから伝わる伝説をテーマに描いている。平維茂（たいらのこれもち）に退治されようとしている紅葉という名の鬼。かつては人間の女性であったという。対峙し合う緊張感が画面に広がっている。京から戸隠に追放された、元は都にいた女性の変わり果てた姿が、恐ろしくもあり悲しく印象に残る。そういった物語を生き生きと描き出す。



廣島樹「紅葉狩」

旺玄展 28室　日府展 2～8室

加藤由利子「三嶋大社の神池桜」。金を背景に艶やかな桜の姿を大胆にまた細やかに描いていく。赤やピンク、白といった桜の花が枝垂れるように上方から下りてくる。下方は水辺になっていて、たゆたいながら波紋が連なり、また奥へと続いてもいっている。美しい自然の姿を六曲の屏風全体に広げるように、また重厚に描き出す筆力に注目する。それらを背後の金によって神々しく鑽仰する。

柳重栄「春の音」。一羽のフクロウがこちらに向かって飛んでくる。左側にももう一羽が木の枝にとまっている。左から伸びやかに樹木の姿が寄せてきて、背後は雪の積もった渓谷の風景となっている。力強く川が手前に流れ下りてきて、それが羽ばたくフクロウの動きと響き合う。そういった動作が画題のように音色となり、またそこに自然の気配が重なって訪れる春を予感させる。

6室

加藤由利子「三嶋大社の神池桜」

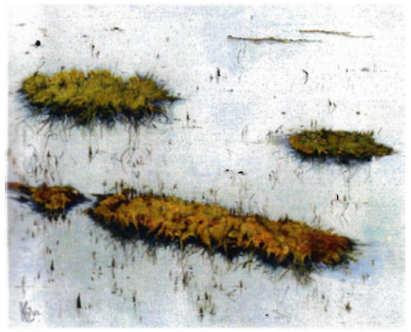
柳重栄「春の音」

松井陽水「雨呟」。滑らかなタッチで描かれた水辺の情景。雨が点々と落ちて波紋を広げ、重ねていく。手前に大きく取られた空間が実に豊かな表情を見せる。中景の細い樹木の影も映り込む。かすかに滲むような調子を巧く使いながら、情感深い風景を絹本に描き起こす。

8室

松林節男「朝の妙高」記念賞。遠景上方に大きく姿を見せる、雪を被った妙高山。手前に向かって徐々に起伏しながら下っていき、川も見える。それらの様子を伸びやかなストロークとまたナイフを巧く使って描き起こしていく。清々しい朝の光が雲や山に当たり鈍く輝くような魅力を見せる。

吉田馨都江「浮島」。強い心象性を帯びた画面が見応えを感じさせる。水面に点々と植物が姿を見せ、場所によってはそれらが集まって島のような姿を見せる。静かな気配がそこにあって、自然の息吹とともに詩情を紡ぎ出す。



吉田馨都江「浮島」

松林節男「朝の妙高」記念賞

松井陽水「雨呟」

石井泰代「雪あかり」日府賞

宮田益榮「どうだん」記念賞

石井泰代「雪あかり」日府賞。丸みを帯びたフォルムの狐が一匹こちらへ向かって歩いてくる。周囲は雪の積もった風景だが、ほとんど青や淡い紫といった色彩で表現されている。狐のそばの細い枝にも雪が少し積もり、またシャボン玉のような調子が入れられてもいる。実に幻想的な雰囲気の中に、心温まる物語が展開していく。

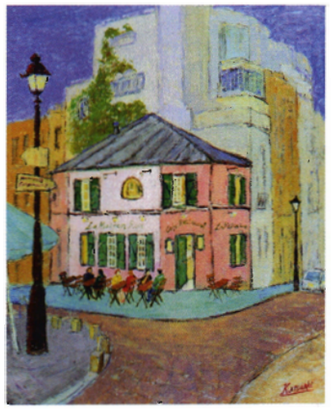
宮田益榮「どうだん」記念賞。燃えるような赤の色彩が樹木の葉となって、揺れるような動きを見せる。背後には軽やかに枝が伸び、また太い幹が屈曲しながら立ち上がる。絵具を重ねるようにして画面に重厚な奥行きを作る。点々と水色が隠し味のように入れられているところも良い。

佐藤勝昭「ラ・メゾン・ローズ（モンマルトル）」。有名なカフェを中心に画面が展開する。三叉路の一隅にピンクのカフェが建ち、その外のオープンカフェで数人がひとときを過ごしている。その様子をじっくりとマチエールを重ねながら味わい深く描き出していく。

塚田稔「天空の光」。右上方に満月が浮かび、その光に照らされて恐ろしい様子が展開していく。悪霊にとりつかれるような人々。原色に近い色彩の扱いで、現代社会の闇と人間の業を表現する。

10室

南部祥雲「河童」。流れるようなフォルムの中に、川で遊ぶカッパたちの様子を造形する。それぞれの様子が生き生きと浮かび上がってくる。堅牢な岩と流れる川、そして泳いだり手を伸ばしたりするカッパの様子を丹念に表現する。



佐藤勝昭「ラ・メゾン・ローズ（モンマルトル）」

塚田稔「天空の光」

南部祥雲「河童」

第71回創造展

（5月20日～5月27日／東京都美術館）

文／磯部靖

1室

鹿野洋子「巌門」。大きな崖が画面の右からせり出してくる。能登金剛の巌門は日本海の荒波により浸食された。そこに海水が寄せてくる。洞門の内部のひんやりとした影の気配が、色彩によって表現される。また崖そのものの立体的な表情も、じっくりとマチエールと色彩により表現されていく。大胆なコンポジションの中に鑑賞者の視線を誘導するような魅力を作り、自然の美しさと厳しい姿を同時に重ね合わせるようにして作品の中に描き起こす。

井上篤司「時は、待つことを知らず」。刻むようにして画面一杯に貼り付けた段ボ

鹿野洋子「巌門」

井上篤司「時は、待つことを知らず」

日府展 8室　創造展 1室